
ーポンドの肉。

ミズマ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一ポンドの肉。

【Nコード】

N3423BA

【作者名】

ミズマ。

【あらすじ】

貿易商アントーニオはシャイロックという金貸しから借金をしていた。返せるあてがなくなったのだが、シャイロックは金も担保もいないという。

当方ブログ掲載後、タイトルと内容を一部変更。

（前書き）

現在ベニスにハマっております。

そんななかで「ベニスの商人」のアレンジ版ができました。

興味のある方は、是非。

「どうなさったの、お兄様」

「いや、うん……」

アントーニオ・トロツォは苦悩していた。

館の自室で一枚の証文を広げ、戻ってくる兆しのない自分の船を思う。愛しい妹からの問いかけにも上の空だ。

友人のために借りた借金だった。

今回の貿易船が戻れば余裕で返済できる額。今回の航路は何度も使った航路。

アントーニオは快く、友人のために金貸しから金を借りた。友人はそれを元手に愛する恋人を伴侶として迎えるため、相手方に結納するという。

彼のためならば私財を投げ打って金銭を工面するのになんの躊躇いもない。

だが借金の証文に記された担保というのは、彼の私財ではなかった。

アントーニオは深いため息をつく。

今回の航路は安全なはずだった。

だが戻ってくるはずの船は戻らず、手元に金のないまま、返済の期日がきてしまった。

（とにかく、どうにか返済の手段を考えなければ）

アントーニオは深いため息をついて、証文を机の上に置いたまま自室を出ていく。

取り残された妹がその証文をまじまじと見ることになるなど気付きもせずに。

その日、シャイロックの館をとある人物が訪れたのは、彼にとつ

て寝耳に水の出来事だった。

「…………であるのだから、この証文は無効となります！　よろしいですね！」

胸を張り、高い声を響かせ、だが掲げた証文を持つ手を震わせたのはまだ年若い青年。

……の姿をした、どう見ても妙齡の女性だった。

たつぷりとしたプラチナブロンドのカツラも、刺繍がたつぷり入った裾の長い上着も、染みひとつないストッキングも、黒いつま先のとがった靴も履いているが、どう見てもそれは女性だった。

ベニスを拠点としてここベルモントに別宅を構えているシャイロツクは、それなりに羽振りの良い貿易商である。

当然そこそこ忙しい。

現に今だって、二隻しか保有していない船の航路と積荷をどうするか、船長と相談を終えたところだったし、前回の航海で得た利益で船を増築するか検討していたところだった。

（船ならばすぐ建造できるが、問題はそれを動かす人材の確保だな）
シャイロツクは思いを巡らせていた。

すぐに自国へ戻って船長と船員の募集をするべきか、と。

だが今は時期が悪い。

なぜなら……。

「聞いてらっしゃいますか？」

彼の思索は甲高い声で途切れた。

「……申し訳ありません。途中で思索に耽っておりまして」

彼は商人特有のすべてのものを煙にまくような笑顔で正直に答える。

だがその正直さが仇となったのか、彼女はすぐにムツとした表情に変わる。

（おや？　これは想定外）

心持ち眉を上げるシャイロツク。

だが彼女はめげずに咳払いをひとつしてから、再び口を開いた。

「ではもう一度申し上げます。

貴公がベルモント商人、アントーニオ・トロツォと交わしたこの証文、『金額の返済ができない場合には、アントーニオ自身の肉一ポンドをシャイロックに与えるものとする』という文面。これ自体は有効ですが、この文章には血液については書かれておりません。あなたがアントーニオ氏より、肉一ポンドを得る際、証文にない血液を一滴でも流したら、契約違反として罰金が科せられることになります。

従って、この証文は無効になる。と、そう申し上げたのですが、おわかりか！」

トロツォ家の代理人である法学者に扮した彼女は見事に言い切った。

シャイロックは、それをちゃんと聞いていた。だから、大きく頷く。

「十分すぎるほどに」

「……へ？」

執務用の布張りの椅子に腰かけたまま、彼は腹の上で指を組んだ。顔には商人特有の、余裕の笑みが貼りついている。

証文を掲げ持った彼女が間抜けな声を上げてしまうほどに。

「更に言うならば、トロツォ氏にお貸した金額もそのままで結構ですよ。贈与した、と考えていただいて結構です。前途ある若者に手を差し伸べるのは当然のことですからね」

そう語るシャイロック自身、かなり若い。まだ二十歳を少し越えたほどの若者のはずだ。

この年でそこそこの成功を収めているシャイロックは、そこそこのやり手なのだ。

そのやり手が、まさかそんなことを言いだすとは思っていなかった彼女である。

驚きのあまり証文を落としてしまっ。

「あ」

だがそれを拾ったのはシャイロックだった。

椅子から立ち上がると証文を拾い上げ、部屋の隅で燃えていた暖炉にくべてしまう。

「え、ちよつと！」

「ほら、これで証文はなくなりました」

どこまでもにこやかなシャイロックは、ちりちりと燃えていく証文を茫然と見つめる彼女を応接用の椅子へと座らせた。先ほど家令が持ってきたティーカップを、白い手に渡す。

「元々、そんな無茶苦茶な契約を迫ろうとは思っていませんよ。あれはトロツツオ氏が無担保で借用するのは貴族の沽券に係わるというので書いた文面でしたしね。ですから、返済の期限が過ぎていても裁判沙汰にしていなかったでしょう？」

シャイロックは執務用の机の鍵のかかった引出しから一枚の書面を取り出した。それは先ほど燃やした証文のもう一通。

そのことに気付いた彼女は身を固くするが、シャイロックはそれも暖炉にくべてしまう。

「さて、これでトロツツオ氏には借金がなくなりましたね」

パンパン、と手を払うシャイロック。

「で、ですが」

「なにか？」

「それではあなたに利益がまるでないではないですか」

彼女がティーカップにひとくちも口をつけていないのを見て、シャイロックは小さく首を傾げた。

「冷めないうちにどうぞ？　うちの家令は他になんの取り柄もありませんが、お茶を淹れるのだけは天下一品ですよ」

「そんな話はしていないでしょう！」

（おや？　また間違えたか？）

シャイロックは今度こそちゃんと首を傾げた。

（これだから、女性の扱いは難しい）

商機を読み取るよりも、よほど。

「それではこうしましょうか」

シャイロックは、家令が彼用にと淹れておいたティーカップを取り上げる。白い湯気を吸いこむと、柔らかな香気が身に染みる。

「アントーニオ・トロツツォ氏には妹君がいらつしやいますね。確か、ポーシャ嬢とおっしゃられる、かわいらしい方が」

「ヘッ!? ……え、ええ、おります、よ?」

なぜか声が裏返る彼女。

「彼女に、私の話し相手になっていただきたいのです」

「えッ!? え、あの、そういうのは、やってませんので!」

「いえいえ、彼女に娼婦の真似事をさせようとは思っておりませんよ。そんなことをしたら、私の信用が無くなってしまうて、この街で商売などできなくなってしまうから」

腰を浮かす彼女をシャイロックは変わらぬ笑顔で制した。

「お恥ずかしいことですが、いまだこの街の社交に疎いもので。ポーシャ嬢にはその辺りの手ほどきをお願いしたいのですよ」

「手ほどき……ですか?」

「ええ。私の先生になっていただきたいのです」

「……それならば、まあ。って、あの、ポーシャ嬢にお伺いを立ててみますね!」

頷きかけた彼女は、自分の扮装を思い出してあわてて言いつくろ
う。

シャイロックはそこに付け込むような卑劣漢ではない。

だからこう言うだけにした。

「次にいらつしやるときは出来ればドレス姿でいらして欲しいと、
申し上げて下さい」

商人得意の底抜けな笑顔を添えて。

法学者が帰ったあと、シャイロックの頬は何故か腫れていた。
(なぜだ)

「なぜって、そりゃあ殴られて当然ですよ、ご主人様」

「ひとの心を読むのは、あまり感心しませんよ」

「家令たるもの、主人の心ぐらい読めない」と

からからと笑う家令。

シャイロツクは家令が淹れ直した茶をすすった。

美味い。腹が立つほどに美味かった。

「しかし、アレだねー。トロツツオさんとこの妹さんが直々に乗り込んでくるとは思ってたねえ。アニキがこのこやってきたら、それをねちねちイジメた拳句に全部チャラにして、恩着せてやるつもりだったんだろ？」

……口は悪いが、大体その通りなのでシャイロツクは黙ったまま茶をすすする。

（いつクビにしてやるるか）

ヴェネツツィアの街のどん底がら這い上がるときに一緒についてきた少年は、口の悪さそのままに、いつの間にかシャイロツクの家令に納まっていた。

「その拳句に妹さんを嫁にしようとしてたんだよねー」

解雇を言い渡したらどんな顔をするだろう、などと平和な想像をしていたシャイロツクは口に含んでいた茶を吹き出しかけた。

だが、どうにか飲み込む。

「そこまで思ってますんよ！」

「またまたあ。でなけりゃ、家名だけ立派な没落貴族と付き合おうなんて思わないでしょーが。オレは使える家令だしー」

「……」

むっつりとした顔で茶をすすするシャイロツクは、どう見てもやり手の貿易商には見えなかった。

「でもま、これでそれもチャラかねえ。気位高そうだったからねえ、お嬢様」

家令は手際よく茶器類を片付けていく。

「……まあ、どうにかしますよ」

「どうにかできるもんなら、どうにかしてるでしょうに」

そうして、二人同時にため息をついた。

「早く奥さん、作れよ。館の中に花がないんだよ、潤いが！」

そのやり手の貿易商も、使える家令も、後日、怒れるトロツォ家御令嬢が豪奢に着飾った姿で館を訪れるとは、思ってもいなかった。

了。

（後書き）

お読みいただきまして、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3423ba/>

ーポンドの肉。

2012年1月8日22時47分発行